

『抗議だけではなにも変わらない』 森大輔

ウクライナ紛争でロシアが核使用を示唆したことにより、終末時計は残り 90 秒にまで迫ったという。だがその間、先進各国は何をしてきたか？

日本政府は『力による一方的な現状変更は認められない』とし、抗議した。国連安保理はロシアを非難する決議を出した。輸出規制、銀行口座凍結など、ロシアに対し経済制裁が課された。NATO 加盟国から、ウクライナへ戦車などの武器供与がなされた。抗議、非難、経済制裁、武器供与……

このような対抗策は、むしろ侵略国の態度を硬直させ、戦争を長引かせるのみではないだろうか。

私が広島原爆資料館を訪れた際、最も印象に残っているものがある。世界で核実験が行われる度に送られた、歴代広島市長による数多くの抗議文だ。アメリカに対する抗議だけでも、実に 247 回にも及ぶという。当時は、これだけの抗議を諦めず続ける姿勢に感銘を受けた。しかし裏を返せば、抗議だけではなにも変わらなかったということでもあると、今は思わざるを得ない。

今年、G7 首脳が広島を訪れ、声明を発表した。

しかし、とある被爆者の方は、『広島まで来てこれだけしか書けないか』と語った。

抗議だけでは何も変わらない。

そもそも、本当に侵略国とされるロシアは悪なのだろうか？ プーチン氏は、かつてナチスドイツの侵略を受けたレニングラードで生まれ育ったという。そんな彼が、NATO の包囲網がロシアに迫ることを脅威と感ずるのは、不自然なことだろうか？ ロシアではなく、プーチン氏ではなく、侵略せざるを得なくなった世界の構造にこそ問題があるのではないか。

世界の構造を変えるのは容易ではない。各々に言い分があり、背景があり、歴史があり、それぞれの正義がある。

そこで必要になってくるのは、実利に基づいた取引、調整ではないのか。利害関係の調整こそ政治家の仕事であり、政治家の仕事の全てと言っても過言ではない。調整の場における交渉材料として、双方にメリットのある経済的取引を持ちかけるしかないと思われる。外交や紛争調停の交渉の場に、核兵器が登場するのはあまりに野蛮である。

核兵器は平和を守ることなどできない。抑止力として必要という意見もあるが、理性ある人間がそんなものに頼っていていいのだろうか。日本において、ナイフを所持することは当然銃刀法違反で犯罪だ。ならば、ナイフほど力を込めずに、ボタン一つ押すだけで数多くの命を瞬時に奪うことのできる核兵器が、どうして許されるのか。核を保有することの恐ろしさに鈍感になってはならない。原爆の開発者の 1 人、オッペンハイマーが「大統領、私の手は血にまみれています」と言ったとき、トルーマンは「これで拭きたまえ」と言ってハンカチを手渡したという。原爆投下当時の大統領ですらこの有り様なのだ。現代を生きる我々が核

の恐ろしさを理解できないのは当然かもしれない。

だが、核の恐ろしさを風化させてはならない。東西冷戦時、全世界の核兵器が一斉に起爆されれば「地球を三回蒸発させられる」とまで言われたという。核の脅威は、人類だけでなく地球環境にも再起不能なダメージを与える。核に限った話ではない。大量破壊兵器をはじめとした、あらゆる兵器や暴力が、交渉材料として使われることなどあってはならない。

核兵器その他兵器の生み出す悲惨な被害については、述べるまでもない。唯一の被爆国として、これからも核廃絶を訴え続けなければならない。

だが、それだけでは足りないように思える。

正義を掲げ、一方を悪と断じることなど誰にでもできる。必要なのは「落としどころ」、妥協点を探ることではないか。完全に正しい国、完全に悪い国はありえない。いつでも正しい国、いつまでも悪い国、というもありえない。 実際、秀吉の朝鮮出兵や、元寇などについて今さら問題視しても仕方がないだろう。

侵略国を悪と断じ、核保有国を悪と断じているだけでは、何も前進しない。歩み寄るための相互理解を第一に考えてこそ、ようやく核廃絶への一歩を踏み出せるのではないだろうか。